



<https://www.kinki-sha.org/>

近畿学校保健学会通信

No.166

2023年10月20日発行
近畿学校保健学会事務局
〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8
摂南大学現代社会学部
TEL : 072-800-5413 FAX : 072-800-8187
Mail : kinkigakkohokengakkai@gmail.com
振込口座 00940-5-181826

目次

第70回近畿学校保健学会（2023年度年次学会）報告 2
1. 第70回近畿学校保健学会を終えて 2
2. 一般講演座長報告 3
3. 教育講演報告 6
4. シンポジウム報告 7
5. 2023年度近畿学校保健学会奨励賞 8
6. 学会印象記 9
2023年度近畿学校保健学会奨励賞抄録 10
2022年度研修セミナー報告 12
2023年度近畿学校保健学会評議員会・総会報告 13
2023年度第1回近畿学校保健学会幹事会議事録 15
2023年度研修セミナー 16
編集後記 16

会費納入のお願い

本学会は会員の皆様の年会費を主な財源として運営しております。

2023年度の会費（3,000円）をまだ納めておられない方は、早急にお振込みくださいますようお願いいたします。

また、会員の皆様におかれましては、周囲の方々に本学会への入会をお勧めください。

右記のQRコードや学会ホームページから会員登録が可能です。よろしく願いいたします。



第70回近畿学校保健学会（2023年度年次学会）報告

1. 第70回近畿学校保健学会を終えて

学会長 入駒 一美

（東京医療保健大学和歌山看護学部）

第70回近畿学校保健学会は、令和5年7月1日に和歌山県立医科大学伏虎キャンパスにおいて、第66回以降4年ぶりに対面で開催いたしました。和歌山城の目の前に新しく建てられたキャンパスでの風光明媚な会場ではありましたが、あいにくの雨模様の、それも、もしかしたら警報も出るのではないかと心配された中での開催でしたが、何とかお天気の協力も得られ、会員の皆様をはじめ、企画運営委員の皆様、和歌山医科大学伏虎キャンパスの皆様並びにスタッフの皆様の多大なご協力により、無事に終えることができました。心より感謝申し上げます。

今学会は、「健康基盤を育成する学校環境の整備」をテーマに、教育講演は関西外国語大学 外国語学部教授の新井 肇先生をお招きして「チーム学校による成長・発達を『支える生徒指導』の進め方～『生徒指導提要』の改訂を踏まえて～」についてのご講演をいただきました。新井先生は平成22年11月に発行された初版の編纂にも関わり、12年ぶりに改訂され、令和4年12月に世に出された「生徒指導」の改訂版（デジタル版）では副座長として携われたことから、この複雑化した、子どもたちが直面する健康上の課題も多様化している中、そして先の見えない混とんとした状況に置かれている社会の中での、これからの生徒指導の方向性について力強くお話をいただきました。

続くシンポジウムでは、学校医、学校長、県教育委員会、養護教諭の4名のシンポジストにそれぞれの立場からご発表いただき、テーマを「健康基盤を育成するチーム学校の推進について」とし、フロアも交えて皆で考える機会を設けました。4名の実践に基づく問題提起は、それぞれにご参加いただいた方々の関心を集めました。十分な議論を深めるまでの時間が不足し、各人が感じ取ったままを持ち帰っていただく形になったことは申し訳なく思います。シンポジストの発表からは、学校医は「学校のかかりつけ医」としてチームの一員として機能していくべきであり、子どもたちのアドボケーターとしての役割も担うべきであるという学校医のお立場、学校長からは危機管理のチーム学校における管理職の役割について、県教委からは県警という体験も踏まえて、特に「性的虐待・性犯罪被害者」へのチーム学校による対応について、養護教諭からは、その視点からのチームで取り組む生徒支援についてのご提言をいただきました。

一般演題では、18題の申込がありましたが、2会場に分かれて「教育、学校保健史」「発達・養育」「大学生の保健」「中学生の保健」「アフターコロナ」「養護実践」に関する16題の研究発表があり、座長の先生方の細やかな運営により活発な質疑応答が行われました。

また、今年度は2名の方に「近畿学校保健学会奨励賞」を授与いたしました。受賞された方の今後のご活躍を祈念いたしております。加えて、若い会員の皆様と学会員の皆様が本学会で研究の成果を会場設定が困るほどに多数ご発表いただけることを願っております。

4年ぶりの対面による学会開催となり、学会開催を機に新たな繋がりもできました。このような時代だからこそ、子どもたちの支援に関わるそれぞれが、お互いの立場の強みを生かしながら協働していけるように共にチーム学校の一員として学校保健の発展に寄与していくために、本学会が今後もますます活発に展開されることを願っております。学校保健に思いを寄せる皆様と交流できる貴重な機会をいただいたことに改めて感謝申し上げます。

終わりに、本学会開催にあたりご後援くださいました和歌山県医師会、和歌山県歯科医師会、和歌山県薬剤師会、和歌山市医師会、和歌山市歯科医師会、和歌山市薬剤師会、和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会、和歌山県養護教諭研究会、みやび内科クリニック、SEIKO MEDICAL 株式会社、関係各位に厚く御礼申し上げます。

2. 一般演題座長報告

第A会場

<教育, 学校保健史>

座長 宮井信行 (和歌山県立医科大学)

A-1 知的障害のある生徒の恋愛に関する学習の検討—高等部生徒への恋愛に関する聞き取り調査より— (鶴岡尚子)

特別支援学校の高等部に通う生徒を対象に、恋愛のイメージや関心、将来への思いなどをインタビュー調査し、質的記述的分析を行ったものである。障害のある生徒においては、社会で一般的に共有されている恋愛の規範的なプロセスに限らない、多様な恋愛観が存在することが示され、個々の生徒の発達段階や価値観を考慮した恋愛の学習を行う必要があることが報告された。今後は、恋愛の捉え方に多様性が認められた背景や、普通学校に通う生徒と異なる特徴を明らかにすることで、教育効果の高い学習内容を検討するにあたっての有益な情報が得られるものと考えられる。

A-2 学校保健史における「養護」概念の成立 (高橋裕子)

わが国の学校保健史における教育学上の養護と学校衛生での養護との関係を明らかにすることをねらいとして、教育学説史上の代表者である吉田熊次が「社会的教育学講義」のなかで述べた養護の概念を詳細に分析したものである。その養護論は、あくまで教育の手段としての養護を基本としており、学校衛生を包含する概念としては捉えられていないことなどが報告された。学校医の補助役として配置された学校看護婦が、その後に養護訓導と名称を変え、現在の養護教諭となっていた経緯との関係、今回得られた新たな知見や今後の研究の展開などについての質疑が行われた。

A-3 高等学校教員の語りから探るeスポーツの教育現場への導入可能性 (星澤玲於奈 他)

全日制および通信制高校の教員を対象に、半構造化面接法によるインタビュー調査を行い、e

スポーツの効果と教育現場への導入可能性について検討したものである。GTAを用いて分析した結果、eスポーツの導入によって協調性やコミュニケーション力が育まれるほか、交流機会の増加による生徒間の関係構築などが期待できる一方で、学習面や日常生活に支障を来すなど、様々なデメリットも予想されるとの報告がなされた。心身の健康への影響や情報モラルの問題などを含めて、eスポーツの導入には検討すべき課題が多いと考えられる。今後、多方面からの研究が活発に行われることで、知見が集積されていくことが望まれる。

<発達・養育>

座長 大川尚子 (京都女子大学)

A-4 中・高校生と大学生の愛着と養育者からの躰の捉え方 (竹端佑介 他)

中・高生と大学生を対象に愛着と彼らが養育者から受けた躰に対する捉え方とかかわりについて検討された興味深い報告であった。愛着傾向の得点では、対象者の「安心」が比較的高いことから、養育者との安定的な愛着が形成されていることが推測され、養育者からの躰について、受けた懲罰も「何もされなかった」が最も多かった。ただ、中学生において、「養育者が子どもに手をあげることで許しを得た」と回答した者が複数いることから、養育者の躰の程度との関連性についてさらなる検討を期待する。

A-5 高校生の子育てに悩む父親に対する養護教諭と協働したペアレント・トレーニング実施の経験 (古川恵美)

発達障害のある高校生の父親への支援として実現可能な方法を検討することを目的に、父親のみが参加するグループで発達障害のある子どもの行動を理解し、効果的な対処法をグループで学ぶというペアレント・トレーニングを実施された貴重な報告であった。参加した父親は、仲間を見つける、子どもの行動を見ることの意義を見出す、行動をほめるポイントを知るというトレーニングを通し、子どもが頑張っていることに気づき、それを子どもに伝えることもほめ

ることに繋がり、それが子どもの適応行動を増やすとともに、親子関係を安定化することになっているというので、今後も継続して取り組んでいただきたい。

A-6 幼児における社会情動的スキルの検討 (玉井久実代 他)

幼児における社会情動的スキルに関する文献レビューを行い、概念や研究方法について検討された報告であった。文献より、社会情動的スキルは伸ばすことのできる“スキル”として概ね捉えられていることが明らかになった。幼児教育において、社会情動的スキルを育むためには、概念の共通認識が必要であり、そのためには社会情動的スキルの概念を包括的にとらえることが課題であり、研究目的に適した研究方法および社会的情動スキルの測定方法を検討する必要があると考えておられ、今後、研究方法や測定方法についての研究を進めていただきたい。

<大学生の保健>

座長 大平雅子 (滋賀大学)

A-7 就労定着支援施設体験における大学生のキャリア形成に関する事例検証 (八木利津子)

教員を目指す大学生のキャリア形成に関わる高等教育プログラムの検討に向けて、特別支援学校に在籍する高校生との交流活動や就労移行支援事業所の体験活動でのフィールドワークを通して、その成果と活動後の思考性を分析された。その結果、観察や参加のみの交流活動では、知識は得られるものの、自分ごととして受け止めきれずに認識が深まらないことが示唆された。しかし、その後、就労移行支援事業所で実際に体験を行うことで、得た知識がより深まり、支援者目線の思考が育つ機会となることが明らかになった。今後、このプログラムを受講した学生達の追跡調査を行っていくことで、より充実したプログラムの開発につながるのではないかと期待できる。

A-8 保健体育科教員をめざす学生におけるメンタルヘルスとその関連要因 (浅沼 徹)

保健体育科教員を目指す学生を対象に、メンタルヘルスの関連要因を検討し、メンタルヘルスの保持増進を踏まえたキャリア支援の実戦に向けた示唆を得ることを目的として、質問紙調査を実施された。その結果、気分障害・不安障害相当の心理的苦痛・教職に対する不安度・教職に対する自信度の全てに関連した要因は「仕事に対する自信」であり、この要素を高めるための支援が最も重要であることが示唆された。一方で、学年が関連する項目も見受けられ、今後学年毎の要因分析を進めることで、より具体的な支援方法についての分析が期待できる。

A-9 大学生における Highly Sensitive Person と精神的健康 (嶺 哲也 他)

近年、広く知られるようになった Highly Sensitive Person (HSP) という言葉に着目し、“HSP と自認しない非 HSP (A)”, “HSP と自認する非 HSP (B)”, “HSP と自認しない HSP (C)”, “HSP と自認する HSP (D)” の各群の精神的健康度について探索的に検討された。その結果、B・C・D 群は A 群と比べて有意に抑うつが高く、B 群は実際に HSP である者たちと同様に高い抑うつを示すことが認められた。これは、本来の概念とは異なり HSP が大学生にとっては生きづらさを表す概念となっていることを示唆しており、今後の学校保健領域における生徒・学生の支援の在り方を見直すための基礎資料ともなり得る研究である。

第 B 会場

<中学生の保健>

座長 寺田和史 (天理大学)

B-1 中学生における自己の体型認識とやせ願望およびメディア情報の利用との関連 (寒川友起子 他)

中学生の、とりわけ女子ではやせ願望の高まりや減量行動がみられるが、そのことにスマートフォンやタブレット端末による、メディア情報の影響があるのではないかという背景に依拠した研究である。結果として、実際の体型と自己が認識する体型との不一致のみられる女子では、

瘦身願望が高く、平日のインターネットの利用時間が多く、またメディア受容能力尺度得点の低い傾向がみられた。フロアからは、メディアの利用頻度についてより詳細な評価が必要なのは、という指摘があった。若年者の健康にとって重要なテーマであり、今後の研究の発展に期待したい。

B-2 他者との関わりの中で、人間的成長を促す授業づくり—Emotional Intelligenceの育みを目指して— (柳かおる)

Emotional Intelligence (EI:感情の知能)とは「自分の情動を知り衝動の自制ができる」「自分の気持ちを自覚・尊重して納得のいく決断ができる」「他者に共感を覚える」等の各能力から成るとされる。本演題は質的研究として行われており、中学校の特別活動における「自己の確立および他者との関わり」をテーマとした授業実践からは、EIの概念と合致する生徒の反応がみられた(研究Ⅰ)。次いで研究Ⅰの結果を参考に、EIの育成を目的とした授業の立案・実施を行ったところ、EIの概念を具体的に提示した効果が見受けられた(研究Ⅱ)。新しい試みであり、今後の研究成果に期待したい。

B-3 中学生の睡眠習慣の実態とストレス反応に関わる要因—ヘルスプロモーションの視点から— (長谷川亜紀)

演題取り消し

<アフターコロナ>

座長 高野知行 (びわこ学園医療福祉センター 野洲)

B-4 生活アンケート集計結果データから見える生徒の心身の状況とアフターコロナの教育のあり方 (東尾真紀子)

コロナ禍における生徒の心の状況とアフターコロナにおける学校の課題について考察するため、A 中学校が毎年行なっている生活アンケートの集計結果が検討された。その結果、コロナ禍の中でも学校が楽しいと感じている生徒は、家族との良好なコミュニケーションや自分の好き

なことへの取り組みが多く、心配事ややる気の低下、イライラなどが少なかった。この結果をもとに学校が意識して取り組むべき課題として、生徒一人ひとりの自尊感情の向上を図ること、および学校を楽しいと感じることのできる環境整備が提示された。

B-5 大学新生のライフスキルと大学適応感について—コロナウイルス感染症 2019 感染拡大前後の比較— (高山昌子 他)

コロナ禍が学生生活へ与える影響を検討するため、新型コロナウイルス感染拡大前後に入学した大学新生を対象に質問紙調査が実施され、両者の調査結果が比較検討された。この結果、ソーシャルサポートには有意な差は見られなかったが、大学適応感については「課題・目的の存在」は減少することなく、「劣等感の無さ」には高い傾向が示された。また、ライフスキルの「対人マナー」および「対人スキル」の得点は感染拡大後の新生に有意に高かった。著者らはライフスキルの向上の背景には他者との交流の改善が関与するものと推測した。

<養護実践>

座長 竹端佑介 (摂南大学)

B-7 養護教諭が職務推進上抱える困難感についての分析—「校種」「学校規模」「養護教諭経験年数」に着目して— (宮慶美恵子)

本研究では養護教諭が職務を推進することで抱える困難感について検討された。「職務困難感」は4つの下位因子が抽出され、これらの下位因子について「校種」および「学校規模」の要因と、「養護教諭経験年数」の要因との関連から分析した。「学校規模」が大きくなるほど「職務困難感」が大きくなり、さらに、大規模校において養護教諭が1名の場合、「職務困難感」が大きいことが示唆された。今後は、養護教諭の抱える「職務困難感」を解消させる要因を詳細に検証し、円滑な職務遂行について検討されることを期待したい。

B-8 保健室経営計画の継続した取り組みと教職員との協働（山本匡代）

本研究は、A 小学校における 2019 年度から 2022 年度の 4 年間の継続した保健室経営計画立案において、作成した養護教諭の気づきと教職員との協働について検討された。保健室経営計画に対する自己評価や他者評価を行うことは、保健室経営における課題が明確になり、次年度に向けての計画を立てやすく、また、他の教職員との協働性の促進に繋がれることが示唆された。今後は、保護者や学校関係者（学校医等）を取り込んだ協働性の拡大とその有効性について検討されることを期待したい。

B-9 社会的養護に関する養護教諭の意識調査（大川尚子 他）

本研究は、小中学校の養護教諭の社会的養護に関する意識について検討された。養護教諭は、里親家庭の子どもと里親への「寄り添い」および「連携」に対する意識が強かった。一方、児童養護施設の子どもたちへの支援として、養護教諭は「施設職員との連携」の不足が明らかになった。また、「生い立ちに関する授業」における子どもたちへの具体的な配慮が挙げられた。社会的養護が必要な子どもへの配慮や支援は、一層重要性を帯びてくる。今後は、養護教諭が学校、養護施設、行政、および各専門家を巻き込んだ具体的な連携方法を検討されることを期待したい。

3. 教育講演報告

「チーム学校による成長・発達を『支える生徒指導』の進め方 ～『生徒指導提要』の改訂を踏まえて～」

講師：新井 肇（関西学国語大学外国語学部）

報告者：内海みよ子（東京医療保健大学
和歌山看護学部）

教育講演は、2022 年に『生徒指導提要（改訂版）』が提示された背景と今後のチーム学校の在り方や養護教諭の役割についてご講演をいただきました。

児童生徒を取り巻く環境が大きく変化している中、児童生徒の現状についてデータをもとに、

「いじめの増加と深刻化」、「不登校の増加と長期化」、「暴力行為の低年齢化」、「児童生徒の自殺者数の増加」などの深刻な現状を示していただきました。さらにこの現状の背景に「社会環境の変化と多様な背景をもつ児童生徒の増加」とし、「家庭の変容」や「スマホ・ネット・スマホゲームに依存する心理」を挙げられました。このような状況の中で、これからの生徒指導の方向性をめぐり、学校および教職員には四つの問いをあげられました。一つ目は VUCA（Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity）な時代に対応する力を身につけるために生徒指導ができることは何かという問い。二つ目は多様な背景をもつ子どもたちに多文化主義に立ち、包摂を目指す生徒指導をどう進めるかという問い。三つ目は法改正が相次ぐなかで、法の理解に基づく生徒指導をどう実践するのかという問い。四つ目は教職員の多忙化を解消するため学校内外の連携・協働に基づく「チーム学校」をどう機能させるのかという問いをあげられました。

四つの問いに対して『生徒指導提要（改訂版）』が示すこれからの生徒指導の基本的な方向性は 3 つあり、1 つ目は全校体制で取り組む児童生徒の成長発達を支える生徒指導への転換を目指す。2 つ目は学習指導と生徒指導の一体化を図る。3 つ目は「チームとしての学校」を実現した生徒指導体制を構築するという方向性があげられました。

上記 2 つ目の方向性については、生徒指導と教育相談が一体となった包括的児童生徒支援体制の構築としては、多様化している児童生徒への対応は、縦割り意識や分業体制ではなくそれぞれの分野の垣根を超えた包括的な支援体制をつくることが求められているとし、3 つ目の方向性については、社会に開かれたチームとしての学校の実現に向けて、児童生徒が抱える課題の多様化・深刻化に伴い、課題解決を個人の力量の向上に委ねるだけでなく、個々の対応による限界を補強するためのシステムを、学校内外の連携・協働に基づいて構築することを目指すという方向性を示されました。

また中央教育審議会答申「チームとしての学

校の在り方と今後の改善方策について」(2015)もご紹介くださり、教員の働き方についても多くのご示唆をいただきました。

「多職種連携の基盤としての相互理解と相互尊重」の大切さにも気付かせていただき、貴重な教育講演となりました。

4. シンポジウム報告

「健康基盤を育成するチーム学校の推進について」

報告者：入駒一美（東京医療保健大学和歌山看護学部）

現代の社会は、ますます複雑化し、子どもたちが直面する健康上の課題も多様化しています。その課題には、身体的な健康だけでなく、心理的な健康、栄養、性に関する問題、生活習慣など、さまざまな側面が含まれています。また、特に現代の急速な変化や不確実性が支配的な社会やビジネスの状況の時代において、教育は重要な役割を果たしており、複雑な問題を解決するためにチームワークとコラボレーションの能力が求められると考えております。そして、教育は、協働学習やグループプロジェクトを通じて、子どもたちが効果的なコミュニケーションやチームワークができるように育てていくことが求められていると考えます。

教育講演を受けて、シンポジウムでは、本学術集会のテーマに迫るために、様々な立場から教育現場等で実践している方々にご提言いただき、フロアの皆様を交えて議論していきたいと考えシンポジウムを企画しました。

～学校医の視点から～

木下智弘（和歌山県医師会・和歌山県学校医会）

学校教育の変化を歓迎しつつ、健康リテラシー向上における学校医の使命と役割を改めて整理し、学校医は「学校のかかりつけ医」という認識を共有したい。そして、今日的な子どもたちの健康問題は教員・学校医のみが取り組んでも解決は難しく、チーム学校の一員という自覚を持って保護者、教育関係者、学校三師などの学校保健関係者が協力し、環境を整えていく必要があ

る。さらに、令和5年4月から施行された「子ども基本法」に則り、子ども目線に立って代弁者してあげるアドボケーター（代弁者）として、子どもがより良い状態になるように導くことが重要である。

～管理職の視点から～

内川さやか（和歌山県立南部高等学校）

この数年間の新型コロナウイルス感染症への危機管理対応においては、「自分事」として教職員が一体となってチーム学校の組織づくりを行った。特に、この校内体制を組織するにあたっては、校長の明確な指示と、専門職である養護教諭の説明がポイントであるとして学校運営を行った。また、県教育委員会との連携も窓口を一本化することによりふれずに連携できた。そして、学校医との連携については、養護教諭が核となりスムーズに行え、他校との連携も校長会や県教育委員会との連携も、情報交換を密に行い、原理原則を踏まえた画一的な指示が安心を生み、混乱を招かずに対応できた。

～県教育委員会の視点から～

棟保勇介（和歌山県教育委員会学校安全班）

性的虐待や性犯罪被害者へのチーム学校による取組について、学校での対応については一人で抱え込まず、直ちに管理職に報告し、組織的な対応を行うことが重要である。そのことから、報告を受けた管理職は、各教職員に対応の役割を割り当てるとともに、専門的な対応を行うことが必要とされ、警察や児童相談所、医療機関などの関係機関と情報を共有して対応することが大切であり、表面化していない場合でも、普段と異なるサインを見逃さずに察知することが求められる。

～養護教諭の視点から～

森田わか（海南市立第三中学校）

新型コロナウイルス感染症への感染拡大防止に留意しながら、これまで以上に健康観察を充実させていたが、発熱以外にも心身の体調不良の生徒が増加し、保健室だけでは対応が難しく

なり、校長のリーダーシップにより学校全体で支援体制を整備し、少しでも登校しやすい環境を整え、生徒の居場所づくりを実現した。さらにスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも連携し、さりげない声かけを依頼したり、必要に応じて生徒や保護者のカウンセリングにつなげたりした。これにより、生徒の支援だけでなく、生徒を支える教職員の同僚性が高まり、お互いに疲弊しないようなサポート体制も構築できた。

全体のまとめとして

それぞれの立場からご提言をいただいたが、共通していることは、垣根を取り払い、お互いの「強み」を活かしながら、立場の違う人たちを理解しようとし、遠慮などせずに「子どもを真ん中」に据えて、「できることを、みんながそれぞれの側面で共に頑張っていく」ことが基盤ではないだろうか。そして、その輪がスパイラルに機能していくことが子どもたちの笑顔につながっていくのではないかと強く感じた。

5. 2023年度近畿学校保健学会奨励賞

選考委員会による審査の結果、次の2名が2023年度近畿学校保健学会奨励賞として採択された。

受賞者：浅沼 徹（京都教育大学）

演題：保健体育科教員をめざす学生におけるメンタルヘルスとその関連要因
(抄録は P.10 に掲載)

受賞のことは

浅沼 徹（京都教育大学）

このたびは奨励賞という大変栄誉ある賞に選出いただき、誠にありがとうございます。身に余る賞をいただいたことに喜びを覚えると同時に、賞に恥じぬよう本研究を深化させて社会や本学会に貢献したいと、身の引き締まる思いであります。

本研究に関わるテーマの着想は、私が大学教員のキャリアを歩み始めた7年前まで遡ります。

最初の職場で保健体育科教員養成に関わることになり、教職課程の学生と接する中で彼らのストレスマネジメントの必要性を実感しました。最初は自身の授業の受講学生を対象に小規模な調査から始め、荒削りながら学会発表や大学紀要での発表を重ねてきました。その後、ご縁があり現職に着任し、研究を進展させようとしたのですが、コロナ禍から追加調査や成果発表が滞ってしまいました。そのような経緯があり、本学会では久しぶりに発表させていただくことができ、のみならず奨励賞をいただいたことは、今後の研究人生を支える大きな柱となります。

本学会では、一般発表で多くの先生方のそれぞれ先進的で魅力的な研究を拝聴でき、それぞれに心を躍らせました。また、「チーム学校」をキーワードとした教育講演やシンポジウムでは、さまざまなお立場の先生方から現場実践を踏まえてのお話を伺うことができました。普段、研究室と講義室と会議室と……と大学内を駆け回っているだけでは知ることができない学校現場での協働について、実践的な内容を知ることができ、貴重な時間を過ごさせていただきました。ここに、本学会でご発表されたすべての先生方に敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

最後に、このような素晴らしい学会を開催していただきました入駒一美会長、ならびに学会開催・運営にご尽力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

受賞者：嶺 哲也（摂南大学学生相談室）

演題：大学生における Highly Sensitive Person と精神的健康
(抄録は P.11 に掲載)

受賞のことは

嶺 哲也（摂南大学学生相談室）

この度は2023年度近畿学校保健学会奨励賞を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。拙発表を素晴らしい賞にご選出いただき、大変光栄に存じます。近畿学校保健学会での発表は初めてのことで、また口頭発表も数年ぶり、足が震えるほど緊張していました。しかし、ご聴講い

ただいた先生方を含め会場全体から和やかな雰囲気を感じ、緊張が少し解れた状態で発表に臨むことができました。誠にありがとうございます。この度の受賞を励みに、今後も研究に取り組んで参ります。

午前の一般演題では、先生方が取り組まれている興味深い研究について拝聴しました。大学教員である先生方や大学院生、学校現場で働かれている先生方など、多角的な視点から発表・議論がなされていたことが印象に残っています。新井肇先生による特別講演では、チーム学校による成長・発達を支える生徒指導についての貴重なお話を拝聴しました。VUCAの時代、発達障害やLGBTQなど多様な背景を持つ子どもたちの増加、いじめや自殺の問題、教員の多忙化など、多くの課題のある教育現場において子どもたちを支えるためには、チーム学校として教職員が連携し機能していく必要性を強く感じました。また、「健康基盤を育成するチーム学校の推進」をテーマとしたシンポジウムでは、シンポジストの先生方のご発表があり、教育現場から得られた視点・知見に多くの刺激を受けました。複雑化・多様化する現代、子どもたちを取り巻く社会問題はまさしく子どもたちが発した助けを求める声であり、子どもたちを支えていくには時代や彼らの特性に合わせて常に検討していく必要があると感じました。

最後になりましたが、4年ぶりとなる対面形式で素晴らしい学会を開催していただきました入駒一美学会長、後和美朝幹事長はじめ学会開催・運営にご尽力賜りました皆様に、改めまして心より御礼申し上げます。

6. 学会印象記

細川愛美（兵庫大学）

和歌山県立医科大学伏虎キャンパスで4年ぶりに対面の形で近畿学校保健学会が開催されました。当日の天気予報で大雨が心配されましたが、小雨が降り注ぐ和歌山城に見守られた地形の下で無事、全日程が開催されました。

午前は2つの会場で一般研究発表が行われました。演題数がやや少ないことが残念でしたが、

どの発表も興味深い研究内容で活発にやり取りがされていました。コロナ禍を経た子供の心身の成長・発達を支援するための今後の学校教育を創造させられました。

午後の教育講演では新井肇先生が、改訂された「生徒指導提要」の内容を交えて子供の成長・発達の支援の進め方から、チーム学校で取組む必要性を説明してくださいました。チーム学校の構築に養護教諭の果たす役割が大きく、課題解決の目指すところをアセスメントする重要性をお話され、養護教諭養成に携わっている私には心に深く残るお言葉をいただいたと感じ入りました。圧巻と思ったのは、支援する側の「心理的安全性」の確保された組織はチームが真に機能すると指摘されたところでした。学校では〇〇教育と分業的な分掌により教育活動が展開されており、現代の複合的・重層的な健康課題を抱えた子供への最適な指導・支援には包括的（包摂的）な支援体制をつくることを示唆され、養護教諭の資質向上にもかかわることを実感し、身の引き締まる思いをしました。子供も大人も元気で過ごすには心身両面の安全・安心が保障されることであり、学校内の教職員間の“風通し”がよいところから連携・協働がうまくいくと確認できました。さらに、シンポジウムでは「健康基盤を育成するチーム学校の推進について」をテーマに、学校医、高等学校長、教育委員会指導主事、養護教諭の先生からお話を拝聴しました。チーム学校の推進、学校環境の整備、生命の安全教育、チームで取組む生徒支援、をそれぞれのお立場から提言され、心身の危機にどのように役割を果たせるのかを考えることができました。

学会の当日は久しぶりに対面でお会いできた先生も多く、同窓会のような和やかな雰囲気で過ごした一日となり、FACE TO FACEでコミュニケーションを交わすことのできる利点を噛み締めることができました。今回の学会は急激に変化する学校の教育環境を考える必要があることを示してくださった大変有意義なものであり、コロナ禍を経た今後の学校保健に果たす役割はますます大きくなることを感じました。

2023年度近畿学校保健学会奨励賞 抄録

保健体育科教員をめざす学生におけるメンタルヘルスとその関連要因

浅沼 徹
京都教育大学

キーワード：教員養成、保健体育科教員、メンタルヘルス、教員資質能力、ストレス対処力

【目的】

大学生において、メンタルヘルスの保持増進は、日々の満足な学習やキャリア形成の上で重要である。

他方で、文部科学省（2022）によれば、令和3年度の全国の公立学校における教育職員の精神疾患による病気休職者数は5,897人であった。これは全公立学校教育職員の0.64%を占め、人数は過去最多であったと報告されている。

上家ら（2013）は、学校教育職員の就労システムについて、「教員は初任者の時点で学級を担任することも少なくなく、就任当時から指導者の立場を余儀なくされる」と述べており、すなわち教員養成課程段階での教員としての資質能力の向上の必要性を示している。

筆者らはこれまで、保健体育科の教員養成課程学生を対象として、教員資質能力の向上やソーシャルサポートの豊富さが、ストレス対処力の高さに関連があることを報告してきた（浅沼ら、2017・2019）。本研究では、保健体育科教員をめざす学生を対象に、メンタルヘルスの関連要因を検討することにした。本研究により、教員養成系大学における、メンタルヘルスの保持増進を踏まえたキャリア支援の実践に向けた示唆を得ることができるものと期待される。

【方法】

2018年7月に、関東圏内の私立A大学体育学部における教職課程1～3年生の計465名を対象に、記名自記式質問紙を用いた集合調査を実施した。

調査項目は、次のとおりである。メンタルヘルスに関する項目として、1) K6 質問票日本語版、2) 教職に対する不安度、3) 教職に対する自信度を尋ねた。また、関連要因として、4) 教員資質能力（6因子：①仕事に対する自信、②教員としての責任感、③教育問題に対する関心、④仕事のやりがい、⑤情報処理能力、⑥情報管理能力）、5) ソーシャルサポート（3因子：①評価的サポート、②情動的・道具的サポート、③情緒的・所屬的サポート）、6) ストレス対処力を設定した。さらに、7) 基本属性（性別、学年）を尋ねた。

有効回答者367名（78.9%）を分析対象とした。分析にはIBM SPSS Statistics ver.26を用い、ロジスティック回帰分析および重回帰分析を実施した。

【結果】

まずK6得点について、先行研究を参考に、カットオフポイントを9点（気分障害・不安障害相当の心理的苦痛：8点以下=なし、9点以上=あり）としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、「仕事に対する自信」（OR=.91, $p=.001$ ）、「評価的サポート」（OR=.94, $p=.012$ ）、「ストレス対処力」（OR=.90, $p=.025$ ）の3項目が単独で有意な関連を認めた。したがって、これらの3項目について得点が低いほど、気分障害・不安障害相当の心理的苦痛が「あり」となるリスクが高いことが示された。

次に、教職に対する不安度について重回帰分析を実施したところ、「仕事に対する自信」（ $\beta=-.41, p<.001$ ）の1項目のみが有意な負の関連を認めた。

さらに、教職に対する自信度について重回帰分析を行ったところ、「仕事に対する自信」（ $\beta=.23, p<.001$ ）、「教育問題に対する関心」（ $\beta=.16, p=.001$ ）、「仕事のやりがい」（ $\beta=.18, p<.001$ ）、「評価的サポート」（ $\beta=.11, p=.023$ ）、「学年（1・2年生=0、3年生=1）」（ $\beta=-.18, p<.001$ ）の5項目が、それぞれ単独で有意な関連を認めた。

【考察】

メンタルヘルスに関する項目の全てに関連していた要因は「仕事に対する自信」であり、これを高めるための支援が最も重要であることが示された。また、「評価的サポート」もK6、教職に対する自信度と関連を示したことから、学生の努力や心がけ、成果を適切に評価し、フィードバックを行うことがメンタルヘルスの保持増進の上で有効であると示唆された。

他方で、1・2年生に比べて3年生は教職に対する自信度が低いことが示されたことから、3年生に対しての重点的な支援も必要であることが考えられた。

【結論】

保健体育科教員をめざす学生を対象に、メンタルヘルスの関連要因を検討した。その結果、共通する重要な要因として、仕事に対する自信の強さと評価的サポートの多さが認められた。また、高学年者の教職に対する自信度を高める支援の必要性が示唆された。

2023 年度近畿学校保健学会奨励賞 抄録

大学生における Highly Sensitive Person と精神的健康

嶺哲也, 竹端佑介
摂南大学学生相談室

キーワード：大学生, Highly Sensitive Person, 精神的健康

【目的】

近年, Highly Sensitive Person (HSP) という言葉が広く知られるようになった。HSP とは, 感覚処理感受性が高い者 (全人口の 15~20%) のことを指す (Aron & Aron, 1997)。感覚処理感受性とは, 音や光をはじめとする環境刺激に対する感受性の個人差を示す特性である。この感覚処理感受性が高いほど良い環境からは良い影響を, 悪い環境からは悪い影響を受けやすいとされ, 学術研究においては主に悪い環境と感覚処理感受性の関連について研究が行われてきた。しかし一般社会の中で HSP という言葉は, 対人関係における傷つきやすさや新しい環境へのなじめなさを説明するために用いられ始めている (平野, 2021)。すなわち, 感覚処理感受性は“生きづらさ”を前提としていないにもかかわらず, HSP という言葉が“生きづらさ”を表す用語として使用されている。平野 (2021) は, 心理学概念および HSP が一般社会において急激に広がる現象について, 不適応を呈する個人が自らの生きづらさが努力不足によるものではないと説明する必要があるためであると考察している。自身の不適応の要因を説明するために HSP という言葉が用いられるのであれば, “HSP と自認しない非 HSP (A)”, “HSP と自認する非 HSP (B)”, “HSP と自認しない HSP (C)”, “HSP と自認する HSP (D)” が存在する。本研究では, これらの群の精神的健康について探索的に検討する。

【方法】

近畿圏の大学に通う大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査時期は 2022 年 9 月から 2022 年 10 月であった。調査参加者は 212 名であり, 回答に欠損のない 175 名 (男性 73 名, 女性 100 名, 性別回答なし 2 名, 平均年齢 19.73 歳) のデータを分析に使用した。本研究は大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た (No.22-08)。

質問紙には以下の尺度項目が含まれていた。

1) Highly Sensitive Person Scale 日本語 10 項目版 (Iimura, Yano, & Ishii, 2023); 感覚処理感受性を測定する尺度であり, 尺度項目について 7 件法で尋ねた。2) 日本語版 Kessler 6; 抑うつ度を測定する尺度であり, 尺度項目について 5 件法で尋ねた。これらの尺度に加え, 「Highly Sensitive

Person (HSP) という言葉の意味を知っていますか?」の項目について「0. 知らない」, 「1. 知っている」の 2 件法で回答を求めた。そして, 「はい」と回答した者 (72 名) にのみ「あなたは, 自分が Highly Sensitive Person (HSP) だと思いますか?」という項目について「1. 全くそう思わない」から「5. 非常にそう思う」の 5 件法で回答を求め, 1~3 に回答した者を HSP 非自認群, 4~5 に回答した者を HSP 自認群とした。

【結果】

はじめに, 感覚処理感受性の得点から $\pm 1SD$ を基準に群分けを行った。 $\pm 1SD$ の範囲が 123 名 (70.29%), $-1SD$ 以下が 26 名 (14.86%), $+1SD$ 以上が 26 名 (14.86%) であり, $+1SD$ 以上に該当する 26 名を HSP 群, それ以外を非 HSP 群とした。次に HSP 群-非 HSP 群, HSP 自認群-HSP 非自認群, この 2 つの軸から, 72 名を A~D の 4 群に分類した。4 群における抑うつ得点の平均順位差の検定を行った (Figure 1)。分析の結果, A は B, C, D との間に有意な差を示した (A-B; 順位差 = -12.66, $p < .05$., A-C; 順位差 = -26.29, $p < .01$., A-D; 順位差 = 24.56, $p < .001$.)。

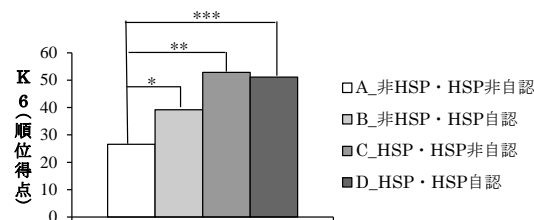


Figure 1. A~DにおけるK6得点についての平均順位差の検定

【考察】

B・C・D 群は A 群と比べて抑うつが有意に高いことが示された。また, B 群, 即ち HSP ではないが HSP と自認している者は, C・D 群と抑うつに有意な差を示さず, 実際に HSP である者たちと同様に高い抑うつを示すことが認められた。この結果は, HSP が“生きづらさ”を表すための用語として用いられていることの裏付けとなりえるであろう。本来 HSP は生きづらさを表す概念ではないが, 学校保健領域において生徒・学生から HSP であるという訴えがあったとき, その背景には本人の感受性の程度を問わず何らかの不適応や生きづらさがあるものと考えられる。

2022 年度研修セミナー報告

テーマ：クールダウンストレッチングの実際と理論

講師：笠次良爾（整形外科医師・日本スポーツ協会公認スポーツドクター）奈良教育大学教育学部保健体育講座

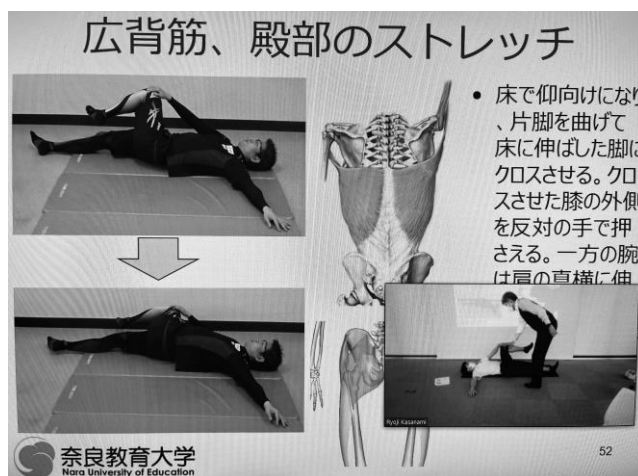
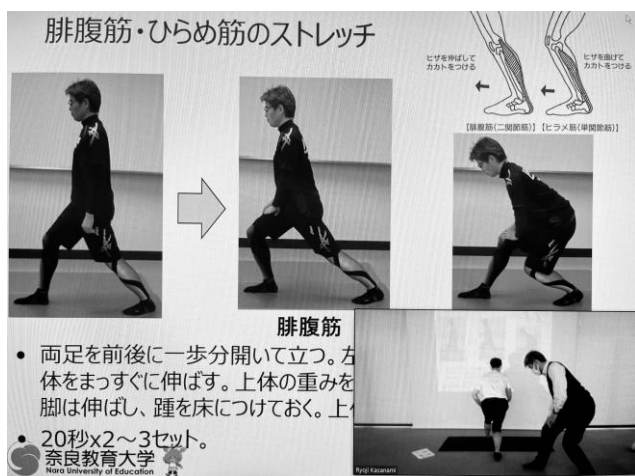
2023年度研修セミナーは、当初「BHELP（災害時における学校現場の避難所開設）やJPTEC（ファーストレスポonder：非医療従者における外傷傷病者への対応）」などのテーマを予定していましたが、日本災害医学会のBHELP実行委員会からの承認が得られなかったため、急きょ「クールダウンストレッチングの実際と理論」となり、講師は近畿学校保健学会常任幹事の笠次良爾先生がご担当されました。今回の研修セミナーは新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり対面開催ではなく、Zoomによるオンライン開催となりました。参加者は大学教員9名、養護教諭2名、大学院生1名の計12名でした。

パワーポイントの資料が事前に配布され、資料をもとに、クールダウンストレッチの「原則と解剖」について生理学的、解剖学的に詳しく解説されました。その後、「ストレッチングの実際」として“肩関節・股関節・体幹”の各部位について動作風景が配信され、笠次先生がアシスタント学生に対して動作を指示しながら的確にポイ

ントを示されていました。受講者は動作風景を確認しながら、各自でその動作を行い、クールダウンストレッチングを体験していました。最後の「クールダウンストレッチングの理論」ではリカバリー方法の種類やリカバリーによる疲労回復の向上だけでなく、筋疲労によって誘発される傷害や成長期にある子どもの外傷との関係まで詳しく解説されました。

研修セミナー受講後の自由記述によるアンケート結果では、“筋を伸ばす理由やその作用でどのような効果があるなどの説明で分かりやすかった”“受講しながら実践できてとても実用的でした”と言った感想だけでなく、“授業の中で学生に伝えたい”“保健室で生徒が痛みなど訴えた場合にやり方などを伝えたい”“子ども達への指導に役立てたい”など、今度の指導に活用したい感想も得ることができ、有意義な研修セミナーとなりました。なお、BHELPにつきましては次回の研修セミナーで開催予定となっています。

（後和美朝）



研修セミナーの風景

2023年度近畿学校保健学会

評議員会・総会報告

議題：1. 2022年度事業報告

2. 2022年度決算報告及び会計監査報告
3. 2023年度予算案（事業計画）
4. 名誉会員の承認
5. 次期学会開催地及び会長
6. その他

1. 2022年度事業報告

1) 会員数

204名（名誉会員13名を含む、2022年3月31日現在）

2) 会議開催、学会通信など

・幹事会（Web会議）

2022年5月8日 第1回幹事会開催
 [2022年4月26日 近畿学校保健学会2021年度会計監査（於：大阪国際大学）]
 2022年9月24日 第2回幹事会開催
 2023年1月21日 第3回幹事会開催

・常任幹事会（Web会議）

2022年4月8日 常任幹事会開催
 2022年9月3日 常任幹事会開催
 2022年12月26日 常任幹事会開催

・年次学会、評議員会及び総会

2022年6月18日 第69回近畿学校保健学会年次学会開催（Web開催）
 会長：高野知行（びわこ学園医療福祉センター野洲）
 2022年6月18日 2022年度評議員会及び総会開催（Web開催）

・学会奨励賞

2022年6月18日
 2022年度近畿学校保健学会奨励賞
 「外部講師による性教育を学校カリキュラムと関連付けるための方策」
 森本 雅子（兵庫教育大学大学院）

・研修セミナー

2023年3月21日 2022年度研修セミナー開催（Web開催）
 テーマ：クールダウンストレッチングの実際と理論

講師：笠次 良爾（整形外科医師・日本スポーツ協会公認スポーツドクター、奈良教育大学教育学部保健体育講座 教授）

・学会通信

2022年5月18日
 近畿学校保健学会通信 No.162 発行
 2022年10月20日
 近畿学校保健学会通信 No.163 発行
 2023年2月8日
 近畿学校保健学会通信 No.164 発行

近畿学校保健学会会員数

2023年3月31日現在

所属	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀県	1	9	16	26
京都府	2	8	16	26
大阪府	4	20	36	60
兵庫県	3	15	30	48
奈良県	2	4	13	19
和歌山県	1	9	15	25
計	13	65	126	204

名誉会員名簿（13名）

2023年7月1日現在

年	氏名	所属
2004年	大山良徳	大阪
2010年	勝野真吾	兵庫
2012年	寺田光世	京都
2012年	八木 保	京都
2014年	大矢紀昭	滋賀
2014年	堀内康生	大阪
2014年	三野 耕	大阪
2015年	山本公弘	奈良
2016年	藤本正三	大阪
2017年	横尾能範	兵庫
2017年	北村陽英	奈良
2019年	松本健治	和歌山
2022年	川畑徹朗	兵庫

2. 2022年度決算報告及び会計監査報告

2023年3月31日現在


【収入】				
	予算額	決算額	増減額	摘要
会計収入	600,000	429,000	-171,000	会費@3,000円×243人
役員選挙積立金	30,000	30,000	0	2025~2027年度役員選挙
雑収入	20,000	5,000	-15,000	広告費
前年度繰越金	1,517,254	1,517,254	0	
合計	2,167,254	1,981,254	-186,000	

【支出】				
	予算額	決算額	差額	摘要
印刷費	100,000	34,910	-65,090	学会通信 (No.162~No.164)
郵送費	120,000	89,270	-30,730	学会通信発送費等
事務費	30,000	7,922	-22,078	学会通信発送封筒代等
人件費	30,000	6,000	-24,000	事務雇用費等
会議費	30,000	0	-30,000	常任幹事会, 幹事会 (年3回)
2021年度研修セミナー	50,000	3,000	-47,000	1回開催 (9月23日)
役員選挙費用	99,000	52,188	0	2025~2027年度役員選挙
年次学会補助金	30,000	200,000	0	和歌山県・第70回事務局へ
ホームページ維持費	60,000	36,252	-23,748	サーバー・ドメイン年間契約料
予備費	1,517,254	0	-1,517,254	
小計	2,167,254	407,354	-1,759,900	
次年度繰越金	0	1,573,900	1,573,900	
合計	2,167,254	1,981,254	-186,000	

【目的別預金】				
内訳	予算額	決算額	預金額	摘要
役員選挙積立金	30,000	30,000	30,000	2025~2027年度役員選挙

上記の通り相違ありません。

2023年5月12日

監事 新脇 裕美子 監事 高橋 裕子 

3. 2023年度予算案 (事業計画)

【収入】				
内訳	予算額	前年予算額	増減額	摘要
会費収入	540,000	600,000	-60,000	会費@3,000円×180人
役員選挙積立金	30,000	30,000	0	2025~2027年度役員選挙
雑収入	20,000	20,000	0	広告費等
前年度繰越金	1,573,900	1,517,254	56,646	
合計	2,163,900	2,167,254	-3,354	

【支出】				
内訳	予算額	前年予算額	差額	摘要
印刷費	100,000	100,000	0	学会通信 (No.165~No.167)
郵送費	120,000	120,000	0	学会通信発送費等
事務費	30,000	30,000	0	学会通信発送封筒代等
人件費	30,000	30,000	0	事務雇用費等
会議費	30,000	30,000	0	常任幹事会, 幹事会 (年3回)
2023年度研修セミナー	50,000	50,000	0	1回開催予定
役員選挙積立金	30,000	30,000	0	2025~2027年度役員選挙
年次学会補助金	200,000	200,000	0	京都府・第71回事務局へ
ホームページ維持費	40,000	60,000	-20,000	サーバー・ドメイン年間契約料
予備費	1,533,900	1,517,254	16,646	
小計	2,163,900	2,167,254	-3,354	
次年度繰越金	0	0	0	
合計	2,163,900	2,167,254	-3,354	

【目的別預金】				
内訳	予算額	前年預金額	予定預金額	摘要
役員選挙積立金	30,000	30,000	60,000	2025~2027年度役員選挙

4. 名誉会員の承認

宮下和久先生（和歌山県立医科大学理事長・学長）

5. 第71回近畿学校保健学会 開催地及び会長

開催地：京都府

会長：大川尚子（京都女子大学）

2023年度

第1回近畿学校保健学会幹事会議事録

日時：2023年5月27日（日曜日）

13:00～14:30

場所：ZoomによるWeb開催

出席者：【幹事長】後和

【常任幹事】大平，宮井

【幹事】（滋賀）高野

（京都）長村，藤原

（大阪）大川，白石，竹端，吉岡

（兵庫）五十嵐，鬼頭，北口，西岡

（奈良）笠次，高田，辻井

（和歌山）森岡，内海

（計19名）

委任状：笠次（計1名）

オブザーバー：入駒，高橋，武内，森脇（計4名）

欠席：井上，笠次，住吉，出水（計4名）

議題：

1. 第70回近畿学校保健学会の開催について

- ・開催方法，プログラム内容について

年次学会長入駒一美先生より，第70回近年学校保健学会は2023年7月1日（土）に和歌山県立医科大学薬学部（伏虎キャンパス）にて対面開催で実施すること，資料をもとに，学会テーマ，プログラムの内容，演題について説明があった。

また，年次学会武内事務局長より，プログラムの内容（開始時間，演題数，会場，抄録等）の説明があった。

- ・2023年度近畿学校保健学会評議員会・総会

後和幹事長より，2023年度近畿学校保健学会評議員会・総会の開催日時（2023年7月1日13時～）および内容について説明があった。

また，後和幹事長より，2023年度近畿学校保

健学会評議員会・総会における出欠席および委任状の電磁的提出についての提案がなされ，承認された。

2. 2022年度事業報告，会計報告および監査について

- ・2022年度事業報告について

宮井常任幹事より，2022年度事業報告について資料をもとに説明があり，承認された。

なお，2022年度の会議（幹事会および常任幹事会）はいずれもWeb開催となったこと，第69回近畿学校保健学会はオンライン開催となり，2022年度評議員会・総会については電磁的方法で実施されたことの報告があった。

その他，第69回近畿学校保健学会奨励賞，2022年度研修セミナーの開催，学会通信発行について報告があった。

2023年3月31日までの会員数の報告がなされ，これについて幹事より，会員数の出入について質問があり，この件，次回の幹事会にて詳細に報告することとなった。

- ・2023年度会計報告および監査について

後和幹事長より，2022年度会計報告について資料をもとに説明があり，高橋監事より会計処理が適切に行われていた旨の報告があった。

3. 2023年度予算案（事業計画）について

大平常任幹事より，2023年度予算案（事業計画）について，資料をもとに説明がなされ，承認された。

4. 名誉会員の推薦について

内海幹事より，宮下和久先生（和歌山県立医科大学理事長・学長）を名誉会員として推薦する提案がなされ，承認された。

5. 次期年次学会（第71回近畿学校保健学会）開催地会長について

後和幹事長より，第71回近畿学校保健学会の開催地が京都府となることの報告があった。

これにあたり藤原幹事より，第71回近畿学校保健学会会長として，大阪地区の大川幹事が年次学会会長として京都府幹事より推薦されたとの報告がなされ，承認された。

6. 研修セミナーについて

後和幹事長より、2022年度第3回近畿学校学会幹事会にて BHELP の研修セミナーを実施することで承認された。しかし、BHELP の研修は都合により実施困難となったため、笠次常任幹事による「クールダウンストレッチングの実際と理論」を研修セミナーとして変更、実施したことの報告があった。また、後和幹事長より、研修セミナー実施結果について資料をもとに報告があった。

7. 学会通信 165 号の掲載内容と発行時期

後和幹事長より、資料をもとに学会通信 165 号についての内容および、発行時期として 6 月 6 日を目安としている旨の説明があった。

8. その他

- ・幹事より、近年の年次学会において大会長講演がなされておらず、大会長講演実施について意見があった。
- ・幹事より、名誉会員の推薦について幹事が推薦するにあたり、所属地区が変わることで推薦し難い状況が多くみられるため、推薦の仕方について今後検討する必要があるとの意見があった。
- ・幹事より、今後の年次学会開催地区の順番についての意見があった。
- ・後和幹事長より、新しい学会ホームページ作成予定について報告があった。また、今後の学会支出を勘案し、学会通信のペーパーレス化 (web 配信) の案がなされ、幹事会にて検討することとなった。

2023 年度研修セミナー

- ・テーマ：地域保健・福祉における災害対応標準化トレーニングコース (BHELP : Basic Health Emergency Life Support for Public) - 避難所開設におけるコーディネーター養成-
 - ・開催日時：12 月 23 日 (土) 9 時~17 時 (予定) ※Web 開催
 - ・申込〆切：2023 年 12 月 7 日 (木) 23 時 59 分
 - ・最大開催人数：24 名
 - ・参加費：近畿学校保健学会会員 2,000 円、非会員 6,000 円
※近畿学校保健学会 (年会費 3,000 円) に入会すれば 2,000 円です。
 - ・申込方法：災害医療イベントポータルサイトより登録してください。
URL : <https://mcls.jp/dport/?evType=BHELP>
- ※内容詳細：日本災害医学会 HP 地域保健・福祉における災害対応標準化トレーニングコースをご覧ください。
URL : <https://jadm.or.jp/contents/BHELP/>



編集後記

4 年ぶりに、対面での年次学会の開催となりました。コロナ禍でオンライン学会が増え、移動をしなくても気軽に学会に参加できる、校務があり出張できなくても後日動画を観ることが出来る等の良いところも多かったのではないかと思います。その一方で、やはり発表に対しての質問や意見がもらにくい等の難しさも感じました。そんな中、昨年度より徐々に対面での学会開催が増えてきて、対面での参加の良さを強く実感しています。発表が終わった後に、少し声をかけて、ディスカッションの続きが出来る等のプログラム外の時間でのコミュニケーションが出来るというのは、やはりオンライン学会では味わえない醍醐味です。今年の学会に参加いただいた皆さまにも、きっと数年ぶりの対面学会の良さを十分に味わっていただけたのではないかと思います。運営いただきました年次学会の大会長の入駒先生をはじめ、事務局の皆さまには改めて御礼申し上げます。
(常任幹事 大平雅子)